福井大学リポジトリ
UNIVERSITY OF FUKUI REPOSITORY

漢字2字熟語の意味推測に及ぼす語構成に関する知識の影響：主要部の位置との関わりから

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2013-03-14 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 桑原, 陽子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10098/7325

漢字２字熟語の意味推測に及ぼす語構成に関する知識の影響
－主要部の位置との関わりから－

桑原陽子

要旨

本稿では，中級後半から上級レベルの非漢字系日本語学習者を対象に，漢字２字熟語の意味推測過程を調査し，漢字熟語の中心的な意味を担う漢字（主要部）のとらえ方を分析した。その結果，学習者は，漢字熟語の語構成について明示的な知識を持っており，それが意味推測に影響を及ぼしていることがうかがわれた。また，漢字熟語の語構成の規則から逸脱した解釈も見られたことから，上級レベルの学習者に対して，漢字の語構成についての再指導が必要であることが示唆された。

キーワード：漢字２字熟語，意味推測，語構成，主要部，非漢字系日本語学習者

１．問題の所在

桑原（2009，2010）では，非漢字系日本語学習者の漢字２字熟語の意味推測過程を調査した結果，意味推測に失敗した漢字熟語は，語構成の判断が困難なものが多いことが示された。例えば，「農薬」は「農」が「薬」を修飾していること，「開業」は「開」と「業」が補足関係にあることは，容易に推測できる。それに対し，「現役」「手段」のように語構成が明確でないものは，個々の漢字の意味がわかっていても語の意味を推測することは難しい（桑原，2009）。これは，漢字熟語を構成する漢字の意味が語全体の意味とどの程度結びつきやすいか，という「意味の透明性（semantic transparency，Mori & Nagy，1999）」の問題である。

しかし，一見，意味の透明性が高いと思われる漢字熟語でも，語意がわからない者がそれを正しく推測することが難しいものがある。例えば，「少女」について，「年若い女の子」ではなく「女の人が少ないこと」と推測した例がある（桑原，2010）。「少女」を構成する「少」を形容詞的要素，「女」を名詞的要素ととらえると，形容詞的要素と名詞的要素で構成される漢字熟語は，「少」が「女」を修飾する関係か，補足関係かの２通りの可能性が考えられる。前者の例としては「新作」，後者の例としては「多言」が存在する(注1)。さらに，「少」に「年若い」という意味があることを知らなければ，なおさら正しい推測は困難であろう。結局のところ，「少女」の語意がわかってはじめて，語構成がどうなっているのかがわかると言える。

漢字熟語の語構成を考えることは，漢字熟語を構成する漢字のうち，左右どちらの漢字が語の中心的な意味を担っているのかを考えることでもある。例えば，「多額」について，「額」が中心的な意味を担っていると考えればその意味は「多い金額」となり，「多」であれば「金額が多いこと」となるだろう。また，「造花」は「造られた花」で「花」が中心的な意味を担うが，「造園」は「庭を造ること」で「造」が中心的な意味を担う。非漢字系日本語学習者が未知の漢字熟語に

遭遇しその意味を推測しようとするとき，この点をどのように判断しているのだろうか。何らかの法則を使用しているのか，それとも恣意的な判断をしているにすぎないのだろうか。もし学習者が何らかの法則を持っているなら，それはどのような法則で推測にどのように影響しているのだろう。

読解活動における未知語の意味推測という視点からこの問題を考えると，漢字熟語が単独で提示された状況は現実的ではない。実際の読解では，文脈や統語情報を総合して推測することが要求されるからである（e.g, Mori 1999, 2002, 2003）。しかし，語の情報と統語情報，文脈情報がそれぞれどのように利用されているかを分析するためには，未知語の意味推測が文脈のない状況でどのように行われ，文脈のある状況で再度提示された際にそれがどう変化するか分析しなければならない。桑原（2009, 2010）は，文脈のある状況で調査しているので，意味推測に用いられる情報の種類について詳細な分析ができなかった。

そこで筆者は，中上級非漢字系日本語学習者を対象に，漢字２字熟語を単独で提示して意味推測を行わせた後，同じ語を文脈のある状況で再度提示し，どのように意味推測が修正されるかについて調査を行った。本研究では，その調査の中で，漢字２字熟語を単独で提示した場合の結果を報告する。

２．漢字２字熟語の語構成と主要部

桑原（2009）と同様に，本研究では漢字の語構成について，日本語教育学会（2005）をもとに，その構造が明確なものを次のように分類する。（　　）内のＮは名詞相当、Ｖは動詞相当、Ａは形容詞相当、ＡＶは副詞相当を示す。

（１）　並列　（Ｎ＋Ｎ：河川　Ｖ＋Ｖ：増加　Ａ＋Ａ：広大）
（２）　対立　（Ｎ＋Ｎ：天地　Ｖ＋Ｖ：売買　Ａ＋Ａ：強弱）
（３）　連体修飾　（Ｎ＋Ｎ：牛乳　Ｖ＋Ｎ：造花　Ａ＋Ｎ：美人）
（４）　連用修飾　（Ａ＋Ｖ：新着　Ｖ＋Ｖ：焼死　ＡＤ＋Ｖ：特集　ＡＤ＋Ａ：最短）
（５）　補足　（Ｎ＋Ａ：頭痛　Ａ＋Ｎ：多額　Ｎ＋Ｖ：日没　Ｖ＋Ｎ：読書）
（６）　重複（個々・黙々）
（７）　接辞や助辞のつくもの（非常・不明／公的・悪化）
（８）　省略（国際連合→国連）
（９）　音借（時計・素敵／旦那・阿片）

「漢字熟語を構成する漢字のうち，左右どちらの漢字が語の中心的な意味を担っているか」については，「主要部」という観点を用いる。小林（2004）では，「主要部」は「『①語全体の品詞を決め②語の意味の中心をなす要素』と規定されることが多い」とされている。例えば，「洗車」は「洗」が主要部なので語全体は動名詞(注2)になるが，「愛車」は「車」が主要部なので，語全体は名詞となり，「洗車する」とは言えるが「愛車する」とは言えない。本研究でも小林（2004）と同様に，「①語全体の品詞を決め②語の意味の中心をなす要素」を「主要部」と定義し，同研究の

分類を参考に主要部の判断を行う。

上記（1）から（5）までの語構成のパターンについて，「主要部」という観点から分析すると，次のように分類することができるだろう。なお，（6）から（9）は，本研究の分析対象に含まれていないので除外する。

（1）「並列」（2）「対立」について，小林（2004）では，「V＋V」は左右両方が主要部であると分析されている。「V＋V」は，漢字２字熟語を構成する左右の漢字が，修飾，被修飾の関係ではなく「対等な関係で複合している」からである。これに準じると，（1）「並列」（2）「対立」は，すべて両側が主要部と判断できるだろう。（3）「連体修飾」（4）「連用修飾」は，右側の被修飾部分が品詞を決定していることが明らかであり，すべて右側が主要部となる。

（5）「補足」は名詞的要素Nが左か右かによって，判断しなければならない。例えば，「日没」（N＋V）は「日が沈むこと」，「読書」（V＋N）は「本を読むこと」であり，どちらも「V」の部分が中心的な意味を担っている。したがって，「N＋V」は右側が主要部で，「V＋N」は左側が主要部となる。この点については，小林（2004）が，「N＋V」は例外的であり，動詞的要素と名詞的要素で構成されるほとんどの２字漢字熟語は，左側の構成要素が主要部になっていることを指摘している[注3]。同様に，「N＋A」は右側が主要部，「A＋N」は左側が主要部となる[注4]。

本研究では，上記の分類をもとに，非漢字系学習者の意味推測結果を分析する。

３．調査方法

３－１．被調査者

非漢字系日本語学習者３名である。学習者それぞれの日本語学習歴（2011 年 10 月現在）を以下に示す。既知漢字数は自己申告である。

学習者Ａ：日本語学習歴３年。日本語能力試験２級合格。既知漢字数 1000 字以上。2011 年 10 月来日以来，本学に在籍。

学習者Ｂ：日本語学習歴５年６ヶ月。既知漢字数 1000 字以上。2011 年４月来日以来，本学に在籍。

学習者Ｃ：日本語学習歴２年６ヶ月。日本語能力試験２級合格。既知漢字数 1000 字以上。2011 年４月来日以来，本学に在籍。

３名とも上級日本語クラスを受講しており，ニュース記事など生の素材の読解に必要な漢字知識がある。また，日本語でインタビューが行える会話力もある。

３－２．調査材料

調査では，漢字２字熟語が記載された調査用リストを使用した（資料１参照）。１回分の調査用リストは，Ａ４サイズの用紙１枚に漢字２字熟語が２０語と，個々の漢字熟語それぞれに確信度評定のための数値が記載されている。

確信度評定とは，学習者が調査リストの記載された漢字熟語の意味を推測した際に，その正しさにどのぐらい自信があるかについて５段階で評定することである。桑原（2009，2010）では，調査リスト中の漢字熟語について，学習者自身に既知か未知かの判断をさせたが，その判断は容

易ではなく，「授業で習った」「実際に辞書で調べたことがある」といった確信度の高いものから，「見たことがあると思う」というあいまいなものまで幅があった。さらに，既知だと判断したものでも，形態の似た漢字と混同している場合も少なくなかった。そこで，本研究では「既知」か「未知」かの判断ではなく，意味推測の確信度を評定させることとした。

漢字２字熟語は，桑原（2009，2010）の調査において，漢字の意味推測が難しかったものに，新たに選択したものを加えた。選択に際しては，以下の点に留意した。

（１）　その漢字熟語が被調査者にとって未知であると考えられるものを選択する。「学校」「食堂」などのように明らかに既知であると考えられる漢字熟語は除外する。

（２）　漢字熟語を構成する個々の漢字が，被調査者にとって既知であると考えられるものを選択する。

（３）　意味の透明性が比較的に低いと考えられる漢字熟語を優先的に選択する。ただし，固有名詞は除外する。

３－３．方法

個別調査であった。2011 年 11 月から 2011 年 12 月まで，１週間に１～２回の頻度で実施した。調査の概要は以下の通りである。

（１）　被調査者に調査用リストを渡し，漢字熟語の読み方をひらがなで書かせた。

（２）　次に，漢字熟語の意味を書かせた。回答は日本語か英語とした。書くのが難しい場合は，後で説明する機会があるので無理に書かなくてもよいこととした。

（３）　（２）で記載した漢字熟語の意味の正しさについてどのぐらい自信があるかを，５段階で評定させた。全く自信がない場合は１，強く自信がある場合は５とした。（２）で意味がうまく書けなかった場合も，可能であれば評定させた。

（４）　（３）の終了後，（１）から（３）の回答について，調査者が日本語でインタビューを行った。特に，漢字熟語の意味について，どういう意味か，なぜそのように考えたのかを詳しく尋ねた。意味がうまく書けなかったものは，口頭で説明してもらった。また，調査前にすでに知っていたものがあるかどうかも確認した。

（１）から（３）は被調査者が１人で行い，被調査者からの漢字熟語に関する質問は受けつけなかった。回答の時間の制限は設けなかった。また，（４）のインタビューは，被調査者の許可をとってＩＣレコーダーで録音した。

４．結果

10 回分の調査結果，合計 200 語を分析対象とする。調査材料中の既知の漢字熟語の数は，学習者Ａが 32 語，学習者Ｂが 11 語，学習者Ｃが６語であった。「既知」には，「見たことがある」「聞いたことがある」と答えたものも含む。例えば「優先」について，「道路に『バス優先』と書いてあるのをよく見る」と答えた場合も，「既知」に含めている。また，漢字熟語を構成する漢字の中に未知の漢字があったと回答した被調査者はいなかった。

分析対象の意味推測の回答の中から，語構成のとらえかたが本来と異なっているものを収集し

た。その結果，学習者ごとに異なった傾向が観察された。特に学習者Ａと学習者Ｂの間には，漢字熟語の主要部を左右のどちらととらえるかについて違いが目立った。そのような違いには，各学習者が持つ漢字熟語の語構成についての知識が大きく影響していることがインタビューからうかがわれた。学習者Ｃは，意味推測ができなかったものが多数を占めるため，本稿では学習者Ａと学習者Ｂの結果を中心にまとめる。

４－１．右側主要部の法則の適応

左側主要部の漢字熟語に対して、右側が主要部であると判断した事例には、次のようなものが見られた。

表１．左側主要部の漢字熟語に対して右側を主要部と判断した事例

漢字熟語 （下線は主要部）	推測された意味	推測された意味の主要部
（１）来日	明日	「日」
（２）点火	点在しているような特別な火	「火」
（３）着信	到着する自信	「信」。「信」を「自信」と解釈。
（４）破談	破る話	「談」
（５）破談	口を差し挟んだ会話	「談」

（５）以外すべて学習者Ｂの事例で，（５）は学習者Ａのものである。学習者Ｂは，調査中に「漢字２字熟語の場合，右側の漢字のほうが重要な意味を担っている」と何度も言及しており、そのことが意味推測に影響を与えている可能性がうかがえた。これらの漢字熟語について，学習者Ａは次のように推測している。

表２．表１（１）から（４）に対する学習者Ａの回答

漢字熟語 （下線は主要部）	推測された意味	推測された意味の主要部
（１）来日	日本に来ること	「来」
（２）点火	火事のあるところ（4－3 節参照）	「火」
（３）着信	小包が届くこと	「着」。「信」を手紙関連と推測。
（４）破談	口を差し挟んだ会話（表１（５））	「談」

学習者Ａは，（４）「破談」以外は，すべて左側が主要部であると判断している。なお，学習者Ｃは（１）は学習者Ａと同様の回答だったが，それ以外は推測不可能であった。また，主要部が不明確なため表１，表２には記載していないが，「着服」について，学習者Ｂは「着ている服」と右側を主要部とし，学習者Ａと学習者Ｃは「服を着ること」と左側を主要部としている。

４－２．左側主要部の法則の適応

右側が主要部である漢字熟語に対して左側を主要部と判断した事例は以下の通りである。

表３．右側主要部の漢字熟語に対して左側を主要部と判断した事例

漢字熟語 （下線は主要部）	推測された意味	推測された意味の主要部
（５）破線	線を破る	「破」
（６）書評	レビューを書く	「書」
（７）家出	意味推測不可能。「家を出る」ならば動詞が左に来るはずなので「出家」になるはずだ、と推測している。	
（８）造花	花を育てる	「造」。「育てる」と解釈。

（５）から（７）は学習者Ａ、（８）は学習者Ｃの事例である。特に学習者Ａは、（７）で解説しているように、「動詞と名詞が補足関係にある２字熟語の場合、主要部である動詞は左に来る」ことを強く意識していることがわかる。

学習者Ｂは，（５）から（７）について表４のように推測しており，すべて右側を主要部と判断していることがわかる。なお，学習者Ｃは，（７）は学習者Ｂと同様の回答で，（５）（６）は推測不可能であった。

表４．表３（６）から（８）に対する学習者Ｂの回答

漢字熟語 （下線は主要部）	推測された意味	推測された意味の主要部
（５）破線	破れた線	「線」
（６）書評	書いて評価する	「評」。「評」を「評価する」（動詞）と解釈。
（７）家出	家を出る	「出」

４－３．修飾関係の構造の誤り

日本語の漢字熟語は，熟語を構成する２つの漢字に修飾関係が成立する場合，修飾される漢字は必ず右側に位置する。しかし，その法則から逸脱する事例がいくつか見られた。（８）から（10）は学習者Ａの事例で，（11）（12）は学習者Ｂである。

表５．被修飾部分が左側に位置すると判断した事例

漢字熟語 （下線は主要部）	推測された意味	推測された意味の主要部
（８）点火	火事のあるところ（点）	「点」
（９）間食	食べるために備え付けた間（ま）	「間」
（10）留年	１年留学する	「留」。「留学」と解釈。
（11）学名	有名な学校	「学」。「学校」と解釈。
（12）著名	有名な作家	「著」。「作家」と解釈。

これらはすべて，漢字熟語を構成する漢字どうしの関係を修飾関係ととらえ，左側の漢字を被修飾部分（主要部）と解釈している。「点火」を例にとるならば，「火がある点（ところ）」のよう

に，右側の「火」が左側の「点」を修飾する型である。学習者Ｂの事例（11）（12）は，どちらも「有名な＋＜名詞的要素＞」に限られているので，「有名」によって修飾される語彙についての何らかの思い込みがある可能性があるが，学習者Ａの事例は，特定の語彙に限ったものではない。明示的な知識として意識されているかどうかは不明だが，少なくとも「２つの漢字が修飾・被修飾の関係にある場合，修飾される漢字（主要部）が左側に位置することができる」と認識されているとは考えられるだろう。

５．考察

本研究で得られた事例は少ないが，インタビューを通して，学習者Ａと学習者Ｂは，漢字の語構成について自分なりの法則を持っていることが示された。そして，それが意味推測に影響を及ぼしていることがうかがわれた。

学習者Ａは，特に「補足」関係について，動詞（主要部）は左側の漢字であることを強く意識しており，左側が動詞的要素の場合は語構成を補足関係としてとらえがちである。また，例外的ではあるが右側に主要部が来る場合があるにもかかわらず（例：家出），「主要部は左側である」ことを意識した結果，推測が不可能であった事例も見られた。一方，学習者Ｂは，意味推測の根拠として「右側の漢字は語の意味に重要な役割を果たす」と何度も言及しており，右側の漢字に注目していることが明らかであった。このような２人の違いを反映して，本来の語構成と異なった解釈をしている事例において，学習者Ａが「左が主要部である」と判断したものに，学習者Ｂは「右が主要部である」と判断し，学習者Ｂが「右が主要部である」と判断したものには，学習者Ａが逆の判断をしている傾向が見られる。

未知の漢字熟語の意味を，語構成に関する知識から特定することは非常に難しい。例えば，比較的意味の透明性が高いと考えられる「造花」も，単独で提示された際には，「『花を造ること』か『造った花』かのどちらかである」という推測が限界であり，根拠を持ってどちらか１つを選択することは不可能である。ただし，文脈情報，統語情報があって正確な意味推測が可能になるのだから，この程度の「揺れ」が文の誤読につながるとは考えにくい。統語情報，文脈情報が付加された場合にこれらの回答がどう修正されるかについては他稿に譲るが，上記の「造花」の事例程度の意味の限定がされている場合，統語情報，文脈情報があればほぼ全員が正しい意味推測を行える。しかし，４－３節で見られたような「２つの漢字が修飾・被修飾の関係にある場合に，被修飾部分が左側に位置することができる」という認識に対しては，そのような語構成の規則は存在しないので，できるだけ早い修正が必要であろう。

学習者Ａ，学習者Ｂの持っている漢字語意の語構成に関する知識が，明示的に教授されたものか，経験的に自分で構築したものかは，インタビューからは明らかにできなかった。上級レベルの学習者になると，読解活動の中で特定の分野の語彙を増やす必要があり，漢字熟語の語構成を整理しながら系統立てて語彙を増やしていくような指導の必要性が低くなりがちである。しかし，語構成の規則から逸脱したとらえ方が見られたこと，自分の意識する法則にこだわり推測が不可能な事例があったことを考えると，上級学習者に対しての漢字の語構成についての再指導が必要

なのではないだろうか。

注１．小林（2004）P.89-90の，野村（1999）からの引用による。

注２．「動名詞」とは，小林（2004）では「サ変になり得る名詞」と定義されている。

注３．小林（2004）では，（３）「連体修飾」の「Ｖ＋Ｎ」（例：造花）のような修飾関係については対象としていない。

注４．「Ａ＋Ｎ」の用例「多額」は，日本語教育学会（2005）で，「額が多いこと」と定義され（５）「補足」に分類されているので，本稿もそれに従う。

本稿は，科研費（22652049）の助成を受けたものである。

引用文献

桑原陽子（2009）「漢字未知語の意味推測に及ぼす語構成の影響ー中上級非漢字系日本語学習者のケーススタディよりー」　『福井大学留学生センター紀要』第４号，21-30.

桑原陽子（2010）「非漢字系日本語学習者の漢字未知語の意味推測における統語情報の利用-中上級学習者のケーススタディより-」『福井大学留学生センター紀要』第５号，1-10.

小林英樹　2004『現代日本語の漢語動名詞の研究』ひつじ書房

日本語教育学会（編）（2005）『新版　日本語教育事典』大修館書店

野村雅昭（1999）「サ変動詞の構造　森田良行教授古希記念論文集刊行会」（編）『日本語研究と日本語教育』1-23. 明治書院

Mori Yoshiko (1999). Beliefs about language learning and their relationship to the ability to integrate information from word parts and context in interpreting novel Kanji words. *The Modern Language Journal*, 83, 534-547.

Mori Yoshiko (2002). Individual differences in the integration from context and word parts in interpreting unknown kanji words. *Applied Psycholinguistics*, 23, 375-397.

Mori Yoshiko (2003). The role of context and word morphology in learning new Kanji words. *The Modern Language Journal*, 87, 404-420.

Mori Yoshiko & William Nagy (1999). Integration of information from context and word elements in interpreting novel kanji compounds. *Reading Research Quarterly*, 34, 80-101.

Williams, Edwin (1991) On the Notions "Lexically Related" and "Head of a Word", Linguistic Inquiry 12, 245-274.

資料１．調査用リスト例（一部）

		意味	自信が				自信が	
			ない				ある	
1	集落		1	2	3	4	5	
2	私語		1	2	3	4	5	
3	来日		1	2	3	4	5	
4	出産		1	2	3	4	5	
5	特売		1	2	3	4	5	
6	外科		1	2	3	4	5	
7	背広		1	2	3	4	5	
8	水準		1	2	3	4	5	

The Influences of Knowledge Concerning Word Formation on Interpreting Unknown Kanji Compounds: Focused on the Head of a Morphologically Complex Word

KUWABARA YOKO

This study investigates the process of interpreting unknown *Kanji* compounds in order to analyze the way of inferring word formation and the head of a morphologically complex word Kanji, which contains the main meaning of the Kanji compound. The subjects of this study were three intermediate and advanced learners of Japanese as a second language (JSL) from a non-Kanji culture. The results shows that learners have their own explicit knowledge concerning word formation of Kanji compounds, and this knowledge can have an influence on interpreting unknown Kanji compounds. Furthermore, the results also show that in some cases the cause of a failure to interpret unknown Kanji compound is the learner's knowledge deviating from the correct rule of word formation for the Kanji compound. This suggests that there can be a need for re-training concerning word formation of Kanji compounds for advanced learners.

Keywords : Kanji compounds, interpreting an unknown word, word formation, the head of a morphologically complex word, Japanese learner from non-Kanji culture